

令和7年度 防府市「未来のほうふを見据えた「公共交通のあり方」に関する調査研究」報告書 概要版

第4章 課題解決に向けた方向性

■ 未来のほうふを見据えた「公共交通のあり方」(報告書 P.83)

- 第2章・第3章の調査結果を踏まえ、交通分野及び子育て支援の分野における課題解決の方向性を、「将来の方向性」として再整理。
- 長期(～10年以内)及び超長期(～20年)の時間軸から、交通分野及び子育て分野における課題解決の方向性を整理。(図表4)
- 交通分野における方向性としては、①需要に応じた輸送手段の最適化、②幹線とフィーダーの役割分担による利便性の向上、③供給体制の効率化と輸送資源の総動員、④環境変化や移動ニーズに対応した移動手段の多様化。
- 子育て分野における方向性としては、②幹線とフィーダーの役割分担による利便性の向上、とりわけ主要駅を交通結節点として徹底的に機能強化する考え方を下支えし、その実効性を高める施策の方向性として位置づけることが重要。特に、中学生・高校生は、通学や待ち時間などを通じて駅周辺を継続的に利用する世代であり、この層を対象として、滞在型空間の整備、相談・支援機能の導入、さらに若者が主体的に関われる活動の場を組み合わせることで、駅周辺施設を「目的をもって訪れる」交通結節点へと転換し、公共交通体系全体の持続性を高める施策として位置づけが可能。

【図表4】課題解決に向けた方向性の体系図(長期・超長期)

		長期(～10年)	超長期(～20年)
交通	需要に応じた輸送手段の最適化	<ul style="list-style-type: none"> ■「買い物特化ルート」の設定 高齢化が進み移動手段が不足する地域では、将来的な対応として、買い物先を目的地とした予約不要の定時運行バスを週回数運行(午前～昼間)、それ以外の時間帯はデマンド運行とする運行形態 ■AIを活用した効率的なデマンドタクシーの運行 デマンドタクシーのAI配車やデジタル技術を活用した利用実態の分析と、地域ニーズに応じた運行体制(ルート・便数・乗降場所等)の見直し・効率化 	<ul style="list-style-type: none"> ■移動型サービスの推進 買い物支援や医療、行政手続き等の生活サービスを提供する移動型サービスの活用
	幹線とフィーダーの役割分担による利便性向上	<ul style="list-style-type: none"> ■鉄道を幹線、路線バスを最寄駅へのフィーダーとして位置づけ 鉄道を幹線、路線バスを駅アクセスとして位置づけ、公共交通全体の利便性向上と鉄道・バスを組み合わせた移動モデルの形成 ■重複区間でのモーダルミックスの推進 鉄道とバスが重複する区間における、時間帯や目的、利用者層に応じた役割分担と、それぞれの特性を活かした公共交通全体の利便性向上 ■主要駅「交通結節点」として徹底的に機能強化 バス停と駅の近接化、乗り換え動線の確保、路線番号の整理・明確化、リアルタイム情報提供システムの整備、駅前空間の滞在・交流機能の形成 	
	供給体制の効率化と輸送資源の総動員	<ul style="list-style-type: none"> ■地域輸送資源の活用 民間企業が提供する輸送サービスを一般客との混乗を可能とすることによる移動手段の確保 ■運行すべき幹線の明確化と資源の集約 公共交通ネットワークにおいて基幹的な役割を担う路線・区間を明確化と、限られた車両や運転士等の運行資源の幹線への重点配分 ■工業団地への通勤用送迎バスの共同運行 就業時間の異なる臨海部工業団地に立地する企業等と連携した共同運行の実施 	<ul style="list-style-type: none"> ■自動運転推進ゾーン設定による運行展開 地域全体で一律に展開するのではなく、供給体制や道路条件、既存公共交通の状況等を踏まえた運行適地の段階的設定と、既存公共交通との役割分担を図った自動運転シャトル等の導入推進区域の設定、効率的かつ安全な運行体制の確保
	環境変化や移動ニーズに対応した移動手段の多様化	<ul style="list-style-type: none"> ■「ラストワンマイル」のためのシェアサイクル・電動キックボードの導入 鉄道駅やバス停から目的地までの「ラストワンマイル(端未交通)」を補完する移動手段の確保と、シェアサイクルや電動キックボードといった小型モビリティの活用による短距離移動の利便性向上 	<ul style="list-style-type: none"> ■自動運転推進ゾーン設定による運行展開【再掲】 ■自動運転小型モビリティの全面展開 1～4人乗り程度の自動運転小型モビリティを活用した移動支援と、需要が少ない地域や狭隘道路が多い地域、高齢者や足が不自由な方に対応した短距離端未交通としての活用

中高生向けの重点支援のあり方

子育て	来訪型拠点としての駅周辺施設の再構築	<ul style="list-style-type: none"> ■「安心して過ごし、学び、交流できる滞在型空間」の創出 若者が目的をもって訪れ、一定時間滞在できる空間の整備と、家庭や学校とは異なる「第三の場」として安心して過ごすことができ、学習・交流・休息といった行動を柔軟に選択できる空間の創出 ■若者の健康・生活・人間関係を支える相談・保健支援機能の導入 若者が抱える心身の不調や生活上の悩み、人間関係に関する課題に対し、日常的にアクセスしやすい支援の場の創出 ■若者の活動参加を促す仕組みの構築 若者が単なる利用者にとどまらず、活動の担い手として関われる仕組みの整備による継続的な来訪や滞在への寄与
-----	--------------------	--

【図表5】未来のほうふを見据えた「公共交通のあり方」 将来イメージ

